

「乳幼児の生活と育ちに関する調査」より  
乳幼児家庭における子どもと保護者のデジタルメディアの使用実態

「乳幼児の生活と育ちに関する調査」より乳幼児家庭における子どもと保護者のデジタルメディアの使用実態が発表されました。

これは東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）とベネッセ教育総合研究所の共同でプロジェクトで、乳幼児の生活や発達についての縦断的な研究の報告です。2016年度に生まれた子どもをもつ保護者に対して毎年1度、継続的に調査する「乳幼児の生活と育ちに関する調査」から、デジタルメディアに関する結果を抜粋してご紹介します。

1. デジタルメディアを使用させる理由の1位は「子どもが使いたがるから」

調査では、2歳から6歳までの期間で、乳幼児がデジタルメディア（スマートフォン、タブレット端末）にどのようにかかわり、保護者自身も含めてどのような使い方をしているかについて聞いています。

デジタルメディアを子どもに使用させる理由について、2歳、3歳、4歳、6歳の各時点で保護者に聞きました。もっとも多かったのはすべての年齢で「子どもが使いたがるから」でした。一方で年齢が上がるにつれて割合が減少する項目は「家事などで手をはなせないときに便利だから」「公共の場所で子どもが騒がないようにするため」でした。子どもの年齢が低いほど、保護者が忙しいときや、公共の場などでふるまいに気をつけたいときに、デジタルメディアを活用している様子がうかがえます。

また、年齢が上がるにつれて割合が増加する項目は「子どもが楽しめるから」「子どもの知識が豊かになるから」「デジタルリテラシーが身につくから」などでした。子どもを楽しませるとともに、デジタルメディアを通して知識やリテラシーを徐々に身につけてほしいという保護者の願いが表れている様子がうかがえます。

このように、保護者がデジタルメディアを使用させる理由は、子どもの年齢に応じて変化していく様子がわかります。

2. スマートフォンとタブレット端末では、使用ルールに異なる傾向も

6歳児をもつ保護者にスマートフォンとタブレット端末の使用ルールについて

て聞きました。「見方（使い方）の約束を守れなかったら注意する」「一人で使うときは大人の目の届く範囲で使う」など、多くの項目で肯定的な回答（「とてもあてはまる」+「まああてはまる」）が8～9割を占めました。約束を守ることや大人の目の届く範囲での使用以外にも、身体面、生活面での影響などに配慮して使用させている様子がうかがえます。また、すべての項目でスマートフォンのほうがタブレット端末より、ルールを設定している割合が高くなりました。特に差が大きい項目は「大人と一緒に使う」で、大人と一緒に使われやすいスマートフォンに比べると、タブレット端末は子どもだけで使うことが多いようです。

また、保護者のデジタルメディアの使用についても聞き取りました。「子どもと顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう」「子どもを遊ばせているときに、スマートフォンなどを操作して、子どもへの注意力が散漫になってしまっている」ことが「1日に数回程度」以上という回答が、いずれも2～3割でした。

保護者がデジタルメディアを使用することで親子のコミュニケーションが阻害され、子どもの生活や発達に悪影響が生じる可能性があることを「テクノフェレンス」といい、注目されています。テクノフェレンスの状況に陥らないためにも、子どものデジタルメディアの使用ルールを親子で確認するとともに、保護者自身のデジタルメディアの使い方が、子どもとのコミュニケーションにどのように影響しているかを振り返ることが必要です。保護者自身の気づきにつなげていただければと思います、少し難しい文章ですがお伝えさせていただきます。

理事長